



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

「三人の聖者 ラマナ・マハルシ③」

ルリ子ちゃんの影像是、目を開けていても閉じていても、わが輩の対象として現れてくる。「想念」というと、瞑想時だけに現れてくるように思うが、そうではない。ルリ子ちゃん本人の身体(物)と、開眼のときのルリ子ちゃん像、閉眼のときのルリ子ちゃん像、そして瞑想に耽っているときのルリ子ちゃん像(想念)は、連続している。

そのうちで瞑想中の「想念」に注目したのが、ラマナ・マハルシである。

全くインドや瞑想座禅に興味のない人は、ラマナについてご存知ないだろうから、少し紹介しておく。

ラマナ(1879-1950)は、17歳のとき「死の体験」をした。事故に遭ったわけでもなく病を患ったわけでもない。突然何の前触れもなく死の衝撃が覆いかぶさってきた。それによって身体は死滅するが魂は不滅であると悟った。彼はすべてを捨てて一人で聖山アルナーチャラにやって来た。彼は一度も聖山を離れることがなく、自己の探求について来訪者に語り、あるときは沈黙で応えた。実にシンプルな聖者であった。

それが魅力であるのと、近年の翻訳本によって広く知られるようになった。わが輩も深い関心をもっている。

わが輩が瞑想していると、ルリ子ちゃんの像(想念)が浮かび上がってくる。

ルリ子ちゃんのことを想いだすのは、心地よいことである。

(只今、瞑想中なので現れないで！)

そんなとき、どうしたらよいか。

ラマナは言う。ルリ子ちゃんを無理やり払いのけない。そして誰にその想念が起こってきたのか?と問いなさい。答えは「私」にである。そして、その「私とは誰か?」を探求しなさい、と。

(ちょっと待ってよ。偉大なる聖者よ。無理だよ)

実際の瞑想中に、「わ・た・し・と・は・だ・れ・か?」などと間延びした問いを発することができるだろうか。問うということは思考することである。考えながら瞑想するということは、相反する矛盾である。なぜなら、瞑想は思考を止めることだからである。

(じゃ、聖者は何を言おうとしているの?)

わが輩は、この問いをシンボリック(象徴的)な表現だと推測している。ここでは語りつくせないのを省略する。とにかく、探求していくと永遠不滅の本当の「私」に至るというのである。

もちろん、凡人たるわが輩が「私」に至ることはない。だから、この問題はしばし横において置くとし、わが輩のルリ子ちゃんの想念を若き研究者はどのように解析するか、聞いてみよう。

研究者は、サンスカーラを「潜在的傾向」とする論もあるので、ヴァーサナー（潜在的傾向）とよく似たもののように思えるが、違いは時間の差だと論文の中で検証した。前者が短いもので、後者が長いものである。

〔前号の、「わが輩のサンスカーラ」と「わが家のヴァーサナー」を参照して下さい〕

わが輩のルリ子ちゃんの想念は短いもの（サンスカーラ）で、それには二つある。縁起の良いものと、そうでないものである。

研究者に問うまでもなく、ルリ子ちゃんの想念は縁起の良いものに違いない。

（ルリ子ちゃんが縁起の悪いものなら、わが輩は悲しいよ）

結論として、ルリ子ちゃんの想念を消す必要など全くない。

それなら、残る疑問として、なぜ今ごろ想念が湧いて来たのか？

それは「死への恐怖」である。ルリ子ちゃんの訃報を聞いて、わが身に迫りくる無意識の恐れが想念を生じさせたに違いない。しかし、それはおどろおどろしいものではなく、ほのぼのとした青春の記憶によって和らげられた。

ルリ子ちゃんありがとう！

追記

ラマナの元へ向う7日前に、クラブ仲間からメールが送信されてきた。

「Bが直腸ガンだ」

わが輩はすぐさま電話した。手術はすでに終わっていて元気そうな声が返ってきた。よかった！腐れ縁とはいえ、Bを失うことはわが世界の一角を失うことを意味する。

長生きしろよ、B君。いつまでも腐れ縁であれ。